

# カナリアの警告

福井県 化学物質過敏症と暮らして再考

若狭湾を望み、海までよく、小浜市郊外の集落に3月、化学物質過敏症(CS)の患者向けモデル住宅が完成した。京都府の建築家でCS対策研究家、足立和郎さん(66)が築30年の住宅を昨年11月から改修してきた。

建材の化学物質などで症状が出るシックハウス症候群対策義務づけを改修建築基準法が施行された2003年7月以前に建てられ改修前の住宅は、文字通りシックハウスだった。代表的な原因物質であるホルムアルデヒドを放出する合板などの建材が多く使われていた。

押し入れの中の合板は全て撤去しアルミシートを張った。床の合板はアルミシートで覆い、さらに広葉樹の無垢材を敷いた。残留した化学物質が塵や床下から室内に入り込まないように「封止」するた

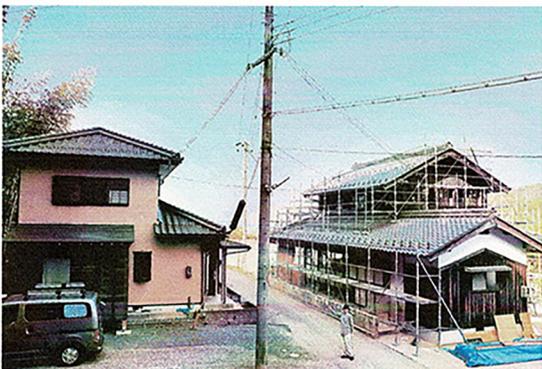
めだ。食品や家電、洋服は製造や流通過程で香料などの化学物質が付着していることも少なくない。このため、玄関横に購入品を一時的に置き、日光や風にさらして臭いを飛ばす屋根付スヘースを設けた。

■ 足立さんは夫婦ともCS患者で、20年以上前から「住める家」を追い求めてきた。化学物質を放出する建材を除去し、壁や床から室内への流入を防ぐリフローームを確立した。CSで授業が受けられない子ども向けの教室整備に取り入れた学校もある。

■ 封止に使ったアルミシートは包装材メーカーに特注し販売。化学物質を吸着する活性炭を活用したCS患者向けの空気清浄機は、北里大病院などがかつて開発したものをベースに考案し、累計で3千台

# ノウハウつなぐ場に

## ⑤ 追い求めた「住める家」



左の建物は化学物質過敏症CSの患者向けモデル住宅。右はCS患者もめあアパートを併設する改修している古民家。3月、小浜市内。

受を売り上げた。モデル住宅にも設置してある。CSを発症した患者は「苦し」と家を探し求め、中には100軒ほど見学された。「お母へて住めない」と嘆く人もいるという。年々どんな柔軟剤や芳香剤による「生活臭」が室内に拡散しているためだ。

■ モデル住宅は希望があれば2、3泊してもいいことも考案している。近隣の家が柔軟剤を多用するといった周囲の空気環境は変えられないが、モデル住宅のある集落のように外環境さえ良ければ一室のみで対策次第でCS患者でも住めることを感じて取ってほしいと話す。

■ 足立さんはモデル住宅の道向かいにある古民家の改修も始めた。2階は空気清浄機などの販売事業を行う事務所など、1階にはCS患者が住めるアパートを併設する。

20年余りの間、千人近い患者と話し、積み重ねてきたCS対策のノウハウがあり、「環境問題として本気を取り組みたい」という人に後継者にならしてもらいたいと思う。本気で取り組む人CS患者が、その家族に代わらないと誓え、CS患者に対して職場と住まいを併せて整備する」と話した。

「住宅の場合によつては人生を左右するほど危険なものになるのに、突き詰めると、ている会社はあまりない」と足立さん。だからこそ「CS患者が住める、安全な家を探求していき歩みを止めず、継承していかない」と被害者は増え続ける」と危惧する。「住める家の考えは一つじゃないかもしれない。誰かが一歩ずつ進めていかないと世の中は変わらない」。事務所兼アパートは、未来アパートをなす場所にした、と考案している。

■ (近隣住平) x x x 問い合わせは足立さんのホームページ(「パハロカパ」CS住宅研究所で検索)から。